

放送のオーラル・ヒストリー

「放送ウーマン」史 (3)

岡本直美さん (元日本放送労働組合書記長) ～“労働者”と“女性”の視線で見つめた放送界～

メディア研究部 広谷鏡子

「放送のオーラル・ヒストリー」のシリーズ「放送ウーマン」史では、放送という特殊な世界ならではの専門職や、これまであまり語られてこなかった、表舞台には出ない女性たちの証言を元に、放送の歩みを新たに振り返る。第3回は、放送局で働く人たちの労働環境の改善のみならず、放送の自主・自律の確保にも尽くしてきたNHKの労働組合（日放労）の活動に30年以上携わり、女性初の書記長も務めた岡本直美さん。

1975年、「接遇」を希望してNHKの受付からスタート、現場での組合活動を経て、85年、女性初の専従中央執行委員に。直前まで所属した厚生部と仕事内容に違和感はなく、組合活動に面白さを見出していく。自ら「組合の原点」と位置づける地域放送局の合理化をめぐる闘争では、小規模の放送局で日常的に放送をサポートし地道に努力する人たちに光を当てるのが、組合の存在価値と信じて取り組む。さらに、育児休職など女性職員が働きやすい環境整備にも力を尽くす。93年2月の「ムスタン」問題では、その反省を元に全職場での「総討議」を働きかけ、2004年7月、芸能プロデューサーによる不正支出に端を発した不祥事への対応では、闘争の要求項目に「会長辞任」を加えて書記長自ら異例の会見を行った。翌05年、海老沢会長は辞任し、岡本さんも同年7月、書記長を退任。その後NHK関連労働組合連合会議長を務め、連合初の女性会長代行にもなった。80年代以降、NHKが辿った歴史を、労働者と女性の視線で見つめた「放送ウーマン」であった。

1. 受付は“天職”

「放送ウーマン」史は、圧倒的な「男社会」である放送業界を生きてきた女性の証言を元に、放送の歩みを新たに振り返るシリーズ。一見華やかに映る放送界だが、放送という特殊な世界ならではの専門職や、表舞台には出ない多くの人々の地道な努力によってこそ、放送は支えられてきたともいえる。NHKの労働組合「日本放送労働組合にっぽうろう（日放労）」の元中央書記長、岡本直美さんも、支える側の一人だった。

日放労には、原則として管理職以外の全NHK職員が加入、2017年現在、組合員数は約7,000人（全職員の約70%）に上る。岡本さんはその活動に30年以上携わり、女性初の専従中央執行委員として放送現場の人々と直に接



おかもなおみ
岡本直美さん

1956年、東京生まれ。75年、都立一橋高校卒業後、NHK入局。インフォメーション部から厚生部を経て、85年からNHK労組「日放労」の女性初の専従中央執行委員、95年から書記長に。現場に戻ることはなく、2005年の退任後は、NHK労連議長、連合会長代行も女性として初めて務めた。15年、NHKを定年退職。現在は、国際ジャーナリスト連盟（IFJ）東京事務所代表として活動中。

し、思いを共有してきた。1995年からは、組合の扇の要ともいわれる書記長を10年にわたって務め、組合員の労働条件の改善に加え、放送の自主・自律の確保にも焦点を当てた活動を行ってきた。

本稿では、80年代以降、NHKが辿ってきた歴史が、労働組合の側からはどう見えていたのか、これまでのオフィシャルヒストリーには描かれてこなかった労働者目線、そして女性目線の歴史を、証言を通じて明らかにしたい¹⁾。

東京の下町に生まれた岡本さんは、両親とも家にいる自営業の家庭で、子どものころは作文や俳句の好きな文学少女、高校時代はスポーツ少女として育つ。高校卒業後の進路選択の際は、「接遇」をやりたくて日本航空を受験するつもりが、第1次オイルショックの影響で採用がなかった。「NHKもあるわよ」との教師の一言で訪れたNHKでは、受付の対応に感激して受験、75年4月、希望した受付に配属される。5月、新人にもかかわらず研修バッジをつけたままNHK放送センター（東京・渋谷）の正面玄関に付き、訪日中の英国・エリザベス女王のお出迎えもした。受付に同期が4人いたが、選ばれたのは彼女だった。

岡本：たぶんいちばん落ち着いていたんじゃないかと思います。天職だと思っていましたし。（受付は）NHKのことすべて、ともかく（建物の）地図は全部頭に入ってなきゃいけないし、この職場は何をやっているかが頭に入らなきゃいけない。ある程度の有名な方はNHKの人でも顔と名前がなるべく一致するようにしなければいけない。結構大変だったんですけど、私は人の名前と顔を覚えることがわりと得意でした。

当時は、23～24歳で受付を外れるのが普通で、結婚退職も多かった。でも「会社の顔」という自負をみんな持っていた。春先になると「電波が頭に突き刺さって痛い」とか、「〇〇アナウンサーにプロポーズされたので来ました」という人たちが玄関に現れもする。そんなお客様を不快にさせずに対応することも受付には求められる。現在はガードマンが受付より前に立つが、昔は受付の女性たちが最前線だった。

70～80年代にかけて、女性の事務職には転勤はなく、原則として営業（受信料確保に関連した業務）は担当させないなど、業務内容も限られていた。岡本さんは、転勤したい、営業職につきたい、と異動希望を出して、「こんなことを書くもんじゃない」と上司に諭されたこともあった。そのときの違和感は、組合運動に関わることになる彼女の一つの原点ともなっていく。

2. 転換期の組合活動のど真ん中に —系列執行委員の3年間—

日放労は、3つの組織からなる。最小単位が、本部の部局や放送局ごとに置かれている118（17年現在）の「分会」で、それらを統括するのが、地域ごとの7つの「支部」と本部の職種別の3つの「系列」（放送、技術、管地〔管理・地域〕）、さらに全体を統括する「中央部」がある。

岡本さんの組合との最初の関わりは、80年の秋。属していた「管地系列」の婦人部推進委員に、欠席裁判で決まったときからだった。その翌年、受付業務を行っていたインフォメーション部から、厚生部に異動するが、これまでと同じ管地系列だったので、「引き続きあなた

がやってよ」ということになり、さらに翌82年10月には、系列の役員である執行委員（非専従）に、女性で初めて選出された。

当時は遊ぶのに一生懸命な20代半ば、気楽な気持ちで執行委員になったものの、「結構大変な役だとは後で知った」。同僚だけでなく、組合の交渉相手である労務部や、厚生部が所属する人事本部の人たちからも驚かれたが、同時に、「頑張ってるね」と背中を押されもした。

岡本：むしろいい経験になるんじゃない、くらいの感じでしたよ。なんだろうな、女性だっというのがまだあったんじゃないかしら。

80年代初頭から、行政改革の対象として国鉄、専売公社、電電公社の三公社があげられ、国鉄の人員削減など、社会全体が公的事業体に厳しい目を向けていた。NHKも例外ではなく、合理化が本格化。「合理化絶対反対」が当時の労働組合の主流だったが、日放労は82年の春闘で、合理化提示の個別項目の協議に応じる代わりに、「実を取る」という戦術に出る（「4.1申し入れ」）。後に、「5年で（賃金）1.5倍」「週休2日制」「定年延長」「連続休暇制度」などを実現していく。

執行委員になったばかりの岡本さんは、まさに、転換期の組合活動の中に放り込まれたのである。

岡本：私はまだ駆け出しの執行委員だったので、細かいことはよくわからなかったんですけど、これまでの（「合理化絶対反対」）を唱えるなど、原理原則を重んじる²⁾上田哲²⁾路線から舵を切って、提案型労働組合に変わったときでもあったでしょうし、NHKよりも先

にいろいろなことを提案して、いかに（成果を）取っていくのかということだったわけです。合理化ということに対しては、危機感を持った人たちも多かったです。なんで組合がそれを認めるんだと。別に個人個人のクビ切りを認めているわけではないんだけど、やはり誤解があって、理解をしてもらうのにはずいぶん時間がかかったんじゃないでしょうか。

管地系列の「婦人部長」（それまでは女性に関する問題を議論する婦人部の部長も、男性がやっていた）を担当することになった岡本さんは、まだまだ職域が拡大されていなかった女性職員の問題に取り組んだ。

特に思い入れがあるのが、江ノ島（神奈川県）に宿泊して、女性職員の課題を話し合う「ミズセミナー」（85年6月）の開催だ。家族の理解が得られるように、手作りの案内葉書を組合員の家庭に送ったり、男性の執行委員に“保父さん”をやってもらうなど、充実した2日間だった。系列の3年間は、「婦人部のことを一生懸命やり切った感があった」という。

3. 組合の面白さに目ざめる

—中央部の専従役員に—

85年10月、系列役員を退任し、組合の居室に顔を出したところ、「ちょうどいいところに来た」。中央部の専従役員になってくれと言った。そして、「もし今日、すぐ返事をいただけないのだったら告示を延ばす」。次期中央執行委員の告示が数日後に迫っていた。

岡本：告示を延ばすって、当時はやはり大変なことなので「それはなあ」と思って。たぶん

その場か何かで、誰にも相談しないでオーケーしたんだと思います。それですぐに告示が出た気がするんです。

中央部の専従役員、それも女性で初めてである。さらに、これまで所属していた厚生部が、これからは交渉相手となる。とはいえ、「やっていることがある意味同じというか。就業規則はよくわかっているから、やりやすかった」。職員制度の変更を提案する側だったのが、組合としてその提案を受ける側となったわけだ。

ところで日放労の中央部というところは、その名称やイメージが想起させるよりも、彼女にとっては楽しい空間だったようだ。

岡本: 専従役員の人たちは、とにかく話していて飽きないというか。次から次に自分が知らない世界の話もしていただけるし。当時私が最年少で、いちばん年の近い人とも5つ違っただけです。かわいがってもらったし、そういう意味ではいいところでしたよ。

公共放送論や受信料制度、人権をどうするか、そういう議論を、もちろん組合員ともできたし、中執(中央執行委員)の中でも喧々囂々けんけんこうこうやっていて。労働条件だけではなく、そういうことがやれる組合はすごいなど。事務系の私からいうととても新鮮で、初めころは発言できなくて聞いていて、これはこうかなと思っていて、奥田さんが言ったことと同じだったりすると、「あ、方向性は間違っなかったんだ」とホッとしたりして(笑)。

奥田さんとは、当時の書記長、奥田良胤よしたね氏。岡本さんが今の岡本さんになるために、彼の存在は不可欠だったろう。岡本さんによれば、

考えが10年ぐらい先を行っている人だった。「育児休職」という言葉がまだまだ一般的ではないころ、初めて奥田さんが中央執行委員会で提起をしたときに、「休職って食べる給食のほう?」と参加者たちは思った、という逸話も残っている。専従になって2年、岡本さんは奥田さんに、「2年経ちましたから降ろしてください」と言ったところ、こんな答えが返ってきた。

岡本:「君は2年間何をやったの?」と言われて。「初の女性執行委員としては、もちろんいろいろと実績はあるだろう。だけど女性ということを外したとき、何か新しいことをやったのか。それを僕に言えたら辞めていい」と言われた。そしたらさ、ないわけよね(笑)。そうかあと思って、受けちゃって、いつの間にかだんだんと泥沼に入ってしまったという。

本人は泥沼と言うが、このさっぱりとした性格で自然体のまま、「組合」という組織に溶け込んでいったのではないだろうか。「女性初」の看板を否応なしに担がされたが、女性であることはデメリットにならなかったか。

岡本:それはなかったですけど、(中央執行委員の担務の一つである)組織部長になるときに、地方の委員長やOBの人たちからは、「彼女で大丈夫なのか」というのはかなり出ました。当時、(組織を束ね、スト等を統制する)組織部長はものすごい要だったから、対応でそれなりに苦労はしたけど。3年間やって、「鬼の組織部長」とも言われるようになって(笑)。

そのころから、組合の仕事にやりがいを感じ

じるようになっていく。事務系の女性職員のま
までは手がけることのないような領域まで、仕
事は広がったのだ。

岡本：自分たちが職員制度をつくるぐらいの勢
いで、あらゆる部分で考えていった。私が
厚生部にいても、そこまでのことはたぶん
できないじゃないですか。すごくそれが面白
かったというか。人材育成の制度にもすごく
不満があったので…。結果的には交渉事だ
から取れないとしても、理想論をそこで要求
して、語っていき、「取れるかもしれない」
ということへの面白さを感じるようになった
んだと思います。

記者やディレクターは、番組を作るという
自分を表現する場が職場にあって、(組合活
動を)長く続けるにはいろいろな判断が要る
と思うけれど、私が面白さを感じたのは、(厚
生部出身で)仕事の内容に違和感がなかった
、ということもあったのかもしれない。



「鬼の組織部長」のころ(1990年)

4. 女性がいかに 働き続けられるかの追求

中央執行委員として、岡本さんがメインで担
当したのは、やはり女性の権利に関する交渉

である。日放労が育児休職を初めて要求した
のは84年だが、当時はまだ、女性の側でも理
解が進んでいなかったようだ。

岡本：(育児休職を)取ることによって辞めさ
せられるのではないかと、居づらくなるのでは
ないかという意見のほうが実は多かったで
す。だから女性の中でもあんまり積極的な意
見が出た記憶はなくて、変な話、産前産後
休暇を取って、それも全部ひっくめて計算
して、辞めていく人が多かったんです。経
営側も1年間も休職を取られて、いくら無給
とはいえ、いろいろなことを補てんしなけれ
ばいけないし、そのまま辞められたら困る、
というのがいちばん大きな、ある意味ネック
だったと思います。だから制度化したときも、
誓約書ではないけれど、産前産後休暇と違っ
て「続けます」という確認をして取らせたと
いうのはありました。

私が専従になった翌年の春に回答があり、
それは女性が専従になったからそろそろ回答
するか、みたいな話もちらっとあったと聞きま
した(筆者注：回答は86年、開始は87年6
月)。

ちなみに、国が育児休業法を施行したのは
92年。NHKは5年も早かったことになる。

彼女自身のことも聞いてみたかった。「女性
初」として多忙すぎたのか、岡本さんは独身。
専従になるとき、局内に結婚の約束をしていた
人がいたと、こっそり教えてくれた。ところが、
専従になることを言っておらず、彼は告示を見
て知っただけらしい。

岡本：すごく怒られて、それはそうだよな、と

思ったけれど。「でも私、2年で辞めるから」と言っていたのに、2年後に相談しないで、また告示が出てしまって。とうとう向こうから断ってきました。組合のそんな役員なんて、と思ったんじゃないですか。

やはり組合をやったら、女性がいかに働き続けるかということを追求するわけですね。先輩たちの悩みも聞きながらやっていると、働き続けるって、おカネだけじゃなくて、自己実現のためにもすごく大事なことだよな、と気づいたんですね。そうすると自分は働き続けたいと思ったし、そんなことをやっていた私が「結婚で辞めます」なんて絶対言えないよなと(笑)。

早すぎた女、だったんでしょうか、と振ってみると、「何でもそうなの。営業行きたい、転職したいもちょっと早かった」と笑う。早すぎた自分のためでなく、後輩の「放送ウーマン」たちのために、岡本さんは頑張った。

岡本：(組合の)新人セミナーのとき、入ったばかりの人たちに、「NHKには育児休職があるから入りました」と言われると、嬉しかったですね。

5. スポットライトが当たらない部分にも光を当てたい — 県内局闘争 —

岡本さんが、自ら「私の組合の原点」と呼ぶのが、「県内局闘争」だ。

NHKは87年、同一県内に複数の放送局があるところは、原則として県庁所在地以外の局を合理化する「県内局の廃止構想」を明らかにした。たとえば、青森県には青森、八戸、弘

前と3つの放送局があったが、このうち八戸、弘前が廃止されることになる。日放労は、行政改革の進展に伴い、NHKへの風当たりも強まるなかで、県内局の将来像を組合から打ち出した。

そして89年、廃止に反対する世論と共闘して、県庁所在地以外の放送局には報道室と視聴者室を設置して放送局を残すよう申し入れし、結果、県内局の廃止は撤回され、支局として残ることとなった。転勤できない組合員の定年までの現地局での勤務も保証された。

岡本：NHKにはいろいろな職種の人がいるけど、放送にどうしてもスポットライトが当たります。それを支えている人たちがたくさんいて、地道に頑張っている人たちに「NHKで働いてよかったな」と思ってもらいたかったんですね。そっちへのシフトというか視線は自分としては持っていたかなと思います。

岡本さんの地域放送局に向ける目は温かい。小規模の放送局にはそれまで、新しく赴任してきた記者に地元的话题を提供する地元採用者や、何かあれば休日でも出てきて味噌汁を作ったりする総務の女性たちがいて、側面から放送現場を支えてきた。県内局が廃止されると彼らの職場は失われるのではないか。「行革だとしても、もうここにはそういう仕事は要らないから、と言われてしまうと違うだろうと」。

岡本：私自身、受付にいたころ、まさに営業への異動希望を拒否されたのに、(効率化で)受付から営業に異動した子が多かったんです。異動しないことを前提に入ってきている

のに、NHKの都合で転勤しろとか、転勤できなかつたら辞めてください、というのが最初にあったものだから、私としては自分の経験も含めて「冗談じゃないわ」と。彼女たちだって若いときは、もしかしたら転勤オーケーだったかもしれないけれど、お子さんもいて、家族もいる中で転勤はできないし。

もうその仕事はないからと放置するのではなく、研修を行うなどして、違う職種に広げていくことを雇用者はまじめに考えなければならない。「手を差し伸べるといふ言い方はおこがましいけれど、そこをちゃんと見て何かしなければいけないと考えるのは、組合しかないのではないか」と岡本さんは思っていた。

闘争中の県内局にもたびたび訪れた。そんななか、勇気づけられることもあった。

岡本：八戸（放送局・当時）の男性、機関操作（空調）、いわゆる昔の技能職³⁾の人です。効率化の話が出ていたころでしたが、その人は「こうやって組合が自分たちのことを気にして、中央からわざわざ来て話を聞いてくれて、一生懸命闘ってくれていることで僕たちはすごく心強い。自分は他の会社にもいたが、組合もなかった。NHKに来たら組合があって、自分たちまでちゃんと見てくれて。組合員でよかった」と言ってくれたの。

それね、南部弁で話すから、ほとんどわかんなかったんですけど（笑）、でも、何となくニュアンスはわかるじゃないですか。私、すごい感動したわけですよ。（本部の）放送センターの分会に行くと、「組合なんか、なんだよ」みたいな人たちが多くい中で、そうやって言ってくれる。でもそれが組合だよ、って思っ

6. メディアの組合だからこそ

93年2月、ある問題が発生する。前年に放送された「NHKスペシャル『奥ヒマラヤ・禁断の王国ムスタン』」の主要な部分で、やらせや虚偽の事実があった」と朝日新聞が報じたことに端を発した「ムスタン」問題⁴⁾である。日放労は、93年春闘の柱の一つとして「ムスタン」総討議に取り組み、それは実質的にテレビ40年の総括を議論する場ともなった。

岡本：自分たちは常識だと思っていたことが、世の中から言うとうそではなかったということについて、もう1回、それぞれやっている仕事で見直そうね、という提起をして、放送現場だけではなくて、すべての職場で自分たちのムスタン問題を議論してもらいました。ドキュメンタリー論の議論ができたという感じがします。一方的に（他の）マスコミからたたかれたりするけれど、こちらはドキュメンタリーをずっと作ってきた言い分もあるわけだから。組合が提起したことで「再現」に対してどう考えるかということ、初めて現場で議論ができたのではないかと思います。現場で当たり前のようにやっていると、立ち止まって議論する時間もないのではと。

職場でも議論に飢えていたのではないかと岡本さんは言う。やりたくてもそんな青臭い議論なんてと避けてきた、それを組合がすくい取り、提起できたのではないかと。

岡本：145（当時）の全分会のレポートはまとめられて、経営側が今後の業務計画の参考にしたいと、現場管理職に配付したんですよ。

熟読するようになって。

その後も「放送と人権」などをテーマに、職場での総討議は続けられた。このほか、外部識者との研究会を立ち上げ、早期にメディアリテラシーに取り組むなど、活動は根づいていく。

7. 「女性初」の書記長、 そして連合中執

95年7月、奥田書記長は委員長に、そして岡本さんが女性初の書記長となる。10月には、「連合」⁵⁾の定期大会で、女性初の中央執行委員に選出される。

85年に日放労の中央執行委員になったとき、岡本さんはカルチャーショックを受けたという。日放労の人たちに対して、ではない。他の組合の人たちと付き合うことになって知った「組合はなんて男社会なんだろう」ということだ。

岡本: ともかく連合なんてわけわかんないし、おやじたちだし(笑)、というイメージも強かったので、とんでもないと思っていました。でも、どうしてもやってくれと言われて。奥田さんにも「絶対ためになるから、大変かもしれないけど、やったほうがいいよ」と説得されて、ここで私が「ノー」と言うと、また連合の女性中執が出るのが遅れる可能性があるとも言われて(笑)。またかと思いながらもオーケーしました。女性一人だから、いろいろな仕事回ってくるんですね。「女性に」と言われると、私しかいないことが多かった。そういう状態は最後まで続きましたけれど。

筆者の経験からしても、「男社会(おやじ社会)」における女性の立ち位置は難しい。持ち上げられているとわかっていても拒否ばかりではだめで、乗っかってしまったほうが得策なこともある。いつも「女性初」を背負わされることになった岡本さんだが、その決断は、しかしメリットをもたらす。連合中執になったことは、日放労での交渉に役立ったのだ。

岡本: (連合の中執として) 厚労省の労働に関する法律を議論する審議会の委員をやりました。たとえば女性の権利に関する要求などは、こういう議論をいま法改正を目指してやっているんだから、早くやりましょうよ、というように、立場的にいろいろなことを知ることができたし、世の中の状況もすごくわかった。女性関連の手当とか、いろいろなものについて取れたのは大きかったと思いますね。連合にいたことで優位に立てました。

女性が働きやすい環境を作ることは、「おやじ社会における女性代表」である岡本さんにとって、目標の一つでもあったのではないかと。「これまでよりもかなり女性関連の報道や動きにアンテナを張るようになりました」と日放労の機関紙でも語っている。

8. もうNHKに戻れない覚悟をして —異例の会長辞任要求—

2004年7月、書記長になって丸9年の夏、NHKに激震が走った。芸能番組のプロデューサーによる不正支出問題⁶⁾を機に、さまざまな不祥事が明るみに出る。日放労は、秋闘(秋季闘争)に向け準備を整えている最中だった。

「秋闘」は、賃金改善などを扱う「春闘」と違い、福利厚生や、他の組合では要求しない「職場のありよう」「公共放送のありよう」などを問う闘争である。日放労書記長・岡本直美にとって予期もしない、最後で最大となる正念場が待っていた。

岡本: 私たちは経営に対して、「とにかく事実関係をちゃんと調べろ、説明責任を果たせ」ということをずいぶん言っていたのですが、日ごとに話が大きくなって、私たちさえ知らない、これはよほど上の人でなければ知らないなという内容まで週刊誌に載っていった。どう考えても管理職の人たちが流しているな、と。おカネの問題だから、本当に視聴者の方の反応が早くて、受信料支払い拒否が現場でも増え始めた。

その問題を国会の総務委員会で審議することになったときに、私たちは国会中継をしろと言ったけれどしなかったんですね。NHKが隠そうとしているんじゃないかという不信感が起こって、(受信料を扱う)営業現場がますます大変になりました。

週刊誌の広告にNHKが常に出るので、電車に乗っている人たちがそれを見たり駅売

りで買ったりするから、都心(での反応)がやはり早く、地方に火がつかのが実はすごく遅くて。(地方は)電車通勤が少ないから見ないでしょう。それでズレがあったのね。はじめ東京でワットとなって、営業も取材現場も「おまえのところは」と言われてすごくやりにくくなったり、取材ができにくくなったりして、それが今度は地方にも飛んで。

現場から続々と悲鳴に近い声が上がってきっていた。日放労も、視聴者、職員にきちんと説明責任を果たせという交渉をしていたが、信頼回復の兆しは見えない。組合の全役員会議で、これは組合が会長の辞任要求をしなかったら、自分たちは役割を果たせないんじゃないかという意見が出た。

岡本: 「わかった。じゃ、考えましょう」という話になって。私たちが要求することで、一つは、(今の体制に)不満な人たちがいろいろと出してきた会長に関する情報流出が止まるのではないかと思った。…彼らだって好きでやっているわけではないだろうと思うし。多少止まったかなと思います。そのこともあって、(会長)辞任要求に至るわけです。

私ははっきり覚えてないけれど、当時の専従役員に、私が「わかった。じゃ、(辞任要求を)やりましょう。その代わりにみんな、この後、NHKに戻れない覚悟をしてね」と言ったらいいです。それでみんな、一瞬ウツと。そこまでのことかと思ったらしい。だけど考えてみたら、そうだよな、(会長辞任要求という)前代未聞のことをやるわけだから。だけどみんな、引けないし、覚悟しました、でもそのときは相当ビビりました、と(あと



秋季闘争中の日放労書記局 (2002年)

で聞きました)。

会長辞任を秋闘の要求項目に入れると決まったが、10月30日、毎日新聞が一面に「日放労、海老沢会長辞任要求へ」と掲載し、他紙も続く。書記局の電話がジャンジャン鳴り始めた。

岡本：日放労のことなんて、(それまで)誰も思ってなかったんでしょうね。新聞はともかく、週刊誌の人たちは誰も知らないわけです。ともかく(書記長の)私が取材を受けないと、いろいろな話になってしまってますから、そこは一本化して対応しました。中央委員会で(秋闘方針案を)何とか満場一致にしたいと思って動くのと、取材対応とで本当に大変でしたね。

11月9日の定期中央委員会で、会長辞任要求を含む8項目の要求を満場一致で決定したあと、岡本さんは書記長として異例の記者会見を開く。憶測で報道されるよりは、会見できちんと答えたほうがいい、まして、メディアの労働組合が取材を拒否することは自らを否定することになる、との判断だった。結果として、取材者の側からも信用されることになり、組合批判の記事は出なかった。

岡本：当時は自分なりに嗅覚が働いたのかわからないけど、(職場のありようを交渉する)秋闘だから、他の要求もつくっているわけで、(辞任要求は)そのうちの一つでしかないわけ。交渉していても他の要求をして、「じゃ、次、不祥事問題」となる。そうすると、(経営側は)そこで何も言わないけど、ともかく



日放労書記長、異例の記者会見(2004年11月9日)

聞くだけは聞く。(組合側は席上で)私たちの思いのたけを言うことはできました。

最後まで中央部に対して反発した分会もあったけれど、営業現場の人たちも「いや、組合が今要求していますし」という言い訳もできたということはあったと思います。やったことで^{おおごと}大事になったという指摘も受けて、それは確かにそうだったかな、という気もしなくはないですけど。でもあのときそういうことをちゃんとしておく必要があったと思います。

年が明けて05年1月25日、ついに海老沢勝二会長は辞任した。そして同年7月、日放労中央大会で岡本さんも書記長を退任する。

岡本：週刊誌にも「女帝」や「労働貴婦人」と書かれて笑っちゃった。顔が見えたのが私だった、ということもあると思いますけど。すると私がいることで、日放労の揚げ足取りとか、いろいろとマイナスになってしまうのではないかと思いました。みんなが職場に戻れるためにも、新しい労使関係を築くという意味でも、私が辞めたほうがいいんじゃないの、ということになって辞めたんですね。

私は戻れなくていいと思っているけれど、他の人たちはそうは言いながらも、まだ若いわけだし。報道の人は報道の人なりに、上からもいろいろ言われながら、そこを跳ね返してやっているわけだから。もしかしたらあの問題がなかったら、まだ書記長をやったかもしれないけれど。

「いちばん仕事をしたのはあそこですね」と、今では笑って話す岡本さん。「かつこいいことを言えば、自分が疲れている姿を見せちゃいけないと思っていた」けれど、ちょっと切ない思い出もある。

岡本:いちばん大変なときは、世の中がクリスマスモードになっていても、毎日12時過ぎまで仕事をしていて、タクシーで帰らざるを得ないような状況でした。表参道、西麻布を通って帰るのですが、ふと見たら「あ、クリスマスなんだ」と思って。じゃあ、ともかく華やかなところに行きたいと思って、運転手さんに急ぎよ、六本木のほうを回ってもらって帰ったことがありました。「お客さん、寂しいですね」と言われて、すごく同情されたんですよ(笑)。

不祥事に始まるこの激動をきっかけに、連合からの支援も得、当時、連合の会長だった笹森清氏に、公共放送議論の場に委員として出してもらった。受信料制度を理解してもらうためには、いろいろな人たちを巻き込むことが重要なことを、岡本さんは身にしみて感じていたのだろう。

一連の出来事で、女性が矢面に立ったことには意味もあった。「あ、日放労で女性が書

記長をやっているんだ、すごいな。こんなことをしているんだ」と励みになったと、多くの女性に言われた。日放労退任のとき、組合の有志が「NAOMI VIDEO」というDVDを作ってプレゼントしてくれたが、連合の女性たちからは、こんなふうには歴史をつくってきたんですね、と羨ましがられた。彼女たちは今でも時々女子会をやる仲間だ。

9. 「放送」に恋した女

日放労の書記長を退任後、「NHK 関連労働組合連合会 (NHK 労連)」議長に。07年には、連合副会長、09年には連合初の女性会長代行にもなる。笹森会長は岡本さんを、「揺るぎのない度胸、情感のある思いやりのある人」と評した。

岡本:度胸はあったかもしれない。ほんとはすごくドキドキしているんだけど、そう見えないうちにみんなに言われて。結局、副会長を2年、会長代行を6年やりました。会長代行って“団結がんばろう”をやらなきゃいけないんですね、たとえばメーデーの何万人ものところで。それがわかっていてから、「一つだけ条件があります、“団結がんばろう”だけはやらない、親の遺言だ」と言って(笑)。しばらくはオーケーだったんだけど、せっかく女性の会長代行がいるのに頼むからやってくれと言われて、あんまり拒否するのかもしれないと思って、しょうがないからやったんですけど。その1回目は相当、弱々しかったですけど、そのうち上手になりました(笑)。

「現場10年、中執10年、書記長10年、N労

連10年」だったという岡本さんのNHK人生は、まさしくその時代のNHKの歴史でもあった。NHKを別の視点から見つめ、動かした一人といっても過言ではないだろう。10年の現場経験で、これだけNHKの組織、放送局を知り尽くした存在はユニークだ。組合役員になってから彼女は各地の放送局に赴き、組合員との直接対話につとめた。各分会にはさまざまな職種の人がいる。それぞれが抱える問題について話ができるように、毎回勉強したようだ。その話を聞いて気づいた。つまり、入局の際に目指した「接遇」と通じているではないか。

岡本: そうね、希望していたのが接遇だったから。今の人たちは違うかもしれないけど、一緒に行った人と飲んで、愚痴を聞いて。(組合を)降りたときに、「もしかしたら私がいちばんNHKの中で知っている人が多いかもしれない、話したことがある人が多いかもしれない」と言った覚えがあります。それは間違いなくそうだったと思います。

接遇で培ったコミュニケーション力に加えて、返事を持ち越さない気風の良さ、「女性初」と担ぎ上げられても、お役に立てればと御輿に乗り込む潔さ、スポットライトの陰で努力する人たちに心を砕く温かさ、岡本さんに備わっているのは、下町生まれの「江戸っ子気質」に思えてならない。彼女のその気質もまた、さまざまな人々が集う放送局という組織を縦横につないだのではないか。「組合に恋した女」などと言われるそうだが、最大級の敬意と感謝を込めた言葉なのだろう。そして恋した相手を「放送」に置き換えても、異論はないに違いない。

(ひろたに きょうこ)

注:

- 1) インタビューは、2016年12月9日、広谷鏡子、原美和子(文研・計画管理部)が行った。
- 2) 上田哲氏は、NHK社会部記者、日放労中央執行委員長を務め、1968年から社会党の公認を受け、日放労組織内候補として参議院で当選2回、79年から衆議院で当選5回。日放労に大きな影響力を持った。08年没。
- 3) 営業の外務、守衛、自動車運転、電話交換、機関操作といった職種は、外技労と呼ばれ、職員制度、賃金制度も違っていたが、上田哲委員長時代に職員制度が一本化、昇進の機会もできたとし、基本給も一緒になった。
- 4) 92年9月30日、10月1日、総合テレビで放送。事実と異なる表現や事実を曲げるような演出があった、など、看板番組での「やらせ」に激しい批判が集中。ドキュメンタリーにおける演出、やらせと再現の違いなど、テレビ番組の作り方をめぐる大きな議論を呼んだ。
- 5) 日本労働組合総連合会。89年に発足した日本の労働運動のナショナルセンター。国際労働組合総連合(ITUC)に加盟し、組合員は約686万人。
- 6) 7月20日、芸能番組のチーフプロデューサーが、番組構成料の名目で制作費の一部をキックバックさせていたとの不祥事が発覚、その後も数々の不祥事が明らかに。受信料の支払い拒否が相次ぎ、NHKの体質に関して怒りの声が寄せられた。

引用・参考文献:

- ・日本放送協会編(2001)『20世紀放送史』日本放送出版協会
- ・日本放送協会編『NHK年鑑』日本放送出版協会
- ・日本放送労働組合編(2005)「2004年～2005年 秋から春へ そして未来へ」
- ・日本放送労働組合編(1998)『日放労史(1977～1997)』
- ・奥田良胤(1998)『壘道 日放労1977～1997』日本放送労働組合発行
- ・田中宏暁(1999)「1999継承と展開2000」日本放送労働組合放送系列編集・発行